

三十六人集

久曾神 昇 著

埼 選 書

久曾神 昇 (きゆうそじん・ひたく)

略 歴	編 著
明治42年 5月31日生	昭和12年 伝宗尊親王筆歌合巻の研究
昭和6年 第一高等学校卒業	同 12年 古今和歌集録覧
同 9年 東京帝国大学卒業	同 14年 校本八雲御抄とその研究
同 14年 福岡女子専門学校教授	同 16年 西行全集 (共編)
同 21年 愛知大学教授	同 17年 畠昭寂蓮
	同 19年 国宝西本願寺本三十六人集の研究 (共著)
	同 27年 平安稀覯撰集
	同 33年 原撰本新撰万葉集と研究
	同 33年 日本歌学大系 別巻

三十六人集

増選書 4

昭和35年 1月5日 印刷

昭和35年 1月10日 発行

定価 370円

著 者 久 曾 神 昇

発 行 者 白 石 義 明

東京都文京区春木町2ノ23 中央会堂

整 版 者 西 田 整 版 所

東京都千代田区神田三崎町2ノ11

印 刷 者 斉 藤 印 刷 所

東京都文京区柳町26

製 本 者 鈴 木 製 本 所

東京都新宿区新小川町2ノ8

発 行 所 株式会社 増 書 房

東京都文京区春木町2ノ23 振替東京8782

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序

平安時代の和歌は、勅撰集及び私撰集、御集及び諸家集、歌合及び定数歌類と三大別して見ることができであらう。詠作と歌集成立との関係より考へるならば、一般的にいへば、最初に歌合及び定数歌類などが成り、ついで各歌人の歌を集めて御集及び諸家集が成り、それら各種の歌集などによつて勅撰集及び私撰集が成ると考へることができよう。

しかしそれら三類には、それぞれ特性がある。歌合及び定数歌類は、普通に詠作動機が一定してをり、それぞれ同時に詠まれたものが多く、作者のみ相違する場合が多い。御集及び諸家集は、作者が一定してをり、詠作動機のみ相違する場合が多い。しかるに、勅撰集及び私撰集の如き撰集は、各種の場合に各歌人の詠んだものを選集したのであり、詠作動機も作者も共に相違するものが多いのである。

1 序

各時代の傾向を見るべきものとしては、一般にまづ勅撰集、ついで私撰集が注意せられるのであるが、更に精しく考へようとすれば、各歌人について調査しなければならないであらう。かくて勅撰作者部類なども作られたのであらうし、作者別撰集も必要となつたのである。殊に

歌壇の状態を見る為には、御集及び諸家集の必要が痛感せられるのである。

私は、古今集以下の勅撰集を調査すると共に、早くより、御集及び諸家集にも留意し、昭和十五年に八代列聖御集を公刊し、殊に諸家集のうち、三十六人集については、昭和十九年に西本願寺本の研究と共に、その全文をも公刊し、その後も幾度も卑見を発表した。その後の調査をも加へ、略述することとするが、紙幅などの都合で、省略のやむなきに至るところも少くないであらう。後日機を得て補訂したいと思つてゐる。

最後に、常に御指導賜はつてゐる佐佐木信綱博士、杉敏介大人、久松潜一博士、特に本書執筆に際して、資料その他について御高配賜はつた田中親美氏、竹本長三郎氏、足立勝亮氏、また御助言下さつた田中塊堂氏、飯島春敬氏、伊地知鐵男氏、そのほか多くの方々に対して、衷心より謝意を表する次第である。

昭和三十四年十一月三日

久曾神 昇

目次

序

第一章 総論

第一節 三十六人集の成立

第一項 二 歌 聖

第二項 六 歌 仙

第三項 三十人 撰

第四項 三十六人 撰

第五項 歌 仙 部 類

第二節 三十六人集の主要伝本

第一項 平安時代の古鈔本

第二項 西本願寺本

第三項 近世以後の諸本

七
九
三
三
三
三
六
八
八
九
二
九
三

第二章 各論

一五

第一項人麿集……………	一七	第一三項兼輔集……………	一九	第二五項清正集……………	三七
第二項貫之集……………	一八	第一四項朝忠集……………	一五	第二六項順集……………	三八
第三項躬恒集……………	一六	第一五項敦忠集……………	一六	第二七項興風集……………	三三
第四項伊勢集……………	一九	第一六項高光集……………	一八	第二八項元輔集……………	三三
第五項家持集……………	一七	第一七項公忠集……………	一九	第二九項是則集……………	三五
第六項赤人集……………	一七	第一八項忠岑集……………	二〇	第三〇項元真集……………	三七
第七項業平集……………	一七	第一九項齋宮集……………	二〇	第三一項小大君集……………	三八
第八項遍照集……………	一七	第二〇項賴基集……………	二〇	第三二項仲文集……………	三三
第九項素性集……………	一八	第二一項敏行集……………	二〇	第三三項能宣集……………	三五
第一〇項友則集……………	一八	第二二項重之集……………	二三	第三四項忠見集……………	三三
第一一項猿丸集……………	一八	第二三項宗于集……………	二四	第三五項兼盛集……………	三七
第二二項小町集……………	一九	第二四項信明集……………	二五	第三六項中務集……………	四〇

結論

二四

附錄

二五

索引

二六

三十六人集

第一章 總論

三十六人集は、歌仙家集とも称し、歌仙三十六人の家集を集めたものであり、それぞれの家集の成立変遷と、三十六人集としての成立変遷とは、自ら区別せられるのである。従つてまづ三十六人集、即ち歌仙家集全体について略述し、後に個々の家集について論述することとする。

第一節 三十六人集の成立

三十六人集は、三十六人撰に基づいて集められたものであるので、まづ三十六人撰の成立を考へることにする。三十六人撰の成立は近因のみを考へれば十五番歌合より見ることもできようが、少し遠く考へれば、やはり二歌聖、殊に六歌仙より述べなければならない。かくて二歌聖より略述することにする。

第一項 二 歌 聖

和歌に対する優劣批判は、すでに奈良時代以前に存したことは、万葉集に徴しても明かであり、殊に優れた歌人を注意することは、早くより存したであらう。確実な文献としては、万葉集が注意せられる。即ち天平十九年（或は二十年）三月三日、大伴家持が、大伴池主に贈つた歌（巻十七、三九六九—三九七二）の題詞に、

含弘之徳垂_ニ恩逢_ニ体_一、不_レ質_ニ之思報_ニ慰陋_ニ心_一。載荷_ニ来眷_ニ無_レ堪_レ所_レ喻_ニ也_一。但以_ニ稚時不_レ涉_ニ遊芸之庭_一、横翰之藻自_レ乏_ニ乎彫蟲_一焉。幼年未_レ達_ニ山柿之門_一、裁歌之趣詞失_ニ乎襄林_一矣。爰辱_ニ以_レ藤統_レ錦之言_一、更題_ニ將_レ石同_レ瓊之詠_一。因是俗愚懷_レ癖不_レ能_ニ默止_一。仍捧_ニ数行_ニ式酬_ニ嗤咲_一。

とあり、それを贈られた大伴池主は、三月五日に答歌（三九七三—三九七五）を送つたが、その題詞に、

昨日述短懷今朝汗耳目。更承賜書且奉不次。死罪謹言。不遺下賤頻惠德音。英雲星氣逸調過人。智水仁山、既韞琳瑯之光彩。潘江陸海、自坐詩書之廊廟。騁思非常、託情有理。七步成章、數篇滿紙。巧遣愁人之重患、能除恋者之積思。山柿歌泉、比此如蔑。彫龍筆海粲然得看矣。方知僕之有幸也。敬和歌。

とある。即ち家持が「幼年未達山柿之門」と述べ、池主は「山柿歌泉、比此如蔑」と答へてゐる。

家持のいふ「山柿」と池主のいふ「山柿」の内容についても考へなければならぬが、家持は、その次に「裁歌之趣詞失乎藁林矣」と述べてゐるので、優れた歌人を意味するものと知られ、池主は「歌泉」と述べてゐる。「泉」は「いづみ」「みなもと」であり、「歌泉」は「歌の泉」「歌の水源」である。酒泉、貨泉、言泉、或ひは春華湧泉などを参照して考へるに、歌道の達人の意と知られる。従つて何れも歌人について述べてゐると知られ、同じ時代、且つ贈答の詞の中に存するので、恐らく同一内容であらう。然らば具体的に誰を指すのであらうか。「柿」は、柿本人麿以外には見出せず、まづ異論はなからう。問題となるのは「山」である。万葉集を調査するに、山上憶良及び山辺赤人のほかに、山口女王（短歌六首）、山口若

磨（短歌二首）、山前王（長歌一首、短歌二首）、山背王（短歌一首）、山部王（短歌一首）、山上憶良の子（短歌一首）など、「山」の字のつく人は少くないが、二人以外は、特に優れた歌人とは考へられないので、山は、憶良及び赤人のうちの何れかであらう。

古来、古今集序などの影響であらうか、赤人とするのが、通説の如くになつてゐたが、明治四十一年佐佐木信綱博士が憶良とする意見を発表せられた（歌学論叢）。しかしその後も島木赤彦氏「万葉集の鑑賞とその批評」（赤彦全集所収）、中村憲吉氏「山部赤人」（万葉集講座第一巻）、窪田空穂氏「山上憶良」（同上）、中河与一氏「赤人に於ける古今的なもの」（文学七卷二号）などは、何れも赤人と述べられてゐる。佐佐木博士は、その後も依然として憶良説を堅持せられ、次第に深く調査せられ、幾度も同意見を述べられ、久米常民氏「山柿論」（国語と国文学十七卷十号）は、憶良説に左袒せられ、その他にも同調者は多いが、なほ決定するまでに到つてゐないやうである。当時の諸事情を考へて見るに、やはり憶良とすべきであらう。私の調査し得たところを少しく述べることにする。

一 万葉集の代表的歌人の歌数を調査すると次の如くなる。すべて短歌であれば比較も容易であるが、万葉集には、その他に長歌及び旋頭歌もあり、煩雑である。殊に長歌は句数が一定してをらず、僅かに七句、九句といふ程度のものもあり、中には百四十九句といふ長いものもあり、歌数のみでは十分でないので、句数をも掲げることとする。

即ち句数について見るに、二百句以上が十一人あり、万葉集に特殊の関係のある家持を除く

11	10	9	8	7	6	5	4	3		2	1	
中臣宅守	大伴池主	大伴旅人	笠金村	山辺赤人	田辺福曆	高橋虫曆	大伴坂上郎女	山上憶良	同(人麿集加算)	柿本人麿	大伴家持	
句数	句数	句数	句数	句数	句数	句数	句数	句数	句数	句数	句数	長歌
一八〇	一四〇	一一〇	二五〇	二五〇	三二四	四五七	一六四	四六九	八九七	八五九	一九六一	旋頭歌
												短歌
二〇〇	二四〇	三三〇	一六六	一八五	一七〇	九四五	三九〇	三三五	二〇五五	三七五	六二二七	合計
二〇〇	三〇〇	三四一	四一〇	四三五	四九四	五五二	五八五	八一〇	七九〇	四二七	四七二	備考
	他に漢詩あり		重出を除く					他に漢詩あり、短歌の中に仏足石歌の誤伝と推定すべきもの五首あり、句数も増す		重出を除く	他に漢詩あり、短歌の中の一は連歌の濫伝といはる	

と、人麿及び憶良が最高となる。天平十九年三月現在として見れば、家持の歌は著しく少くなるので、家持を加へても、人麿及び憶良が最高となるであらう。赤人は、第七位で、五十首(四百三十五句)となり、憶良の六割にも及ばない。万葉集所載歌が、赤人の歌の全部といふわけではあるまいが、万葉集を二十巻にまとめたのは家持と推定せられるので、その所載歌数(句数)は、家持の言辭を解するのに、有力な参考となる筈である。

二 長歌は、歌人の優劣批判の基準とも解し得るものである。歌格研究者小国重年は、長歌詞珠衣に、

柿本朝臣人麿の歌は、万葉集に数多あれども、対句なきは一首もなし。殊に対句を多く詠み入れたる歌なむ多かりける。それが中にも、連対句、長対句を交へたる歌は殊に多かりける。山部宿禰赤人は、連対句を好みてよめり。中にも四句連対句を交へし歌のみ多くて、長対句を詠み入れたる歌と、対句なき歌とは一首も見えず。

と述べ、また六人部是香は、長歌玉琴に、

そも／＼重隔対は、あるが中にも賦得難くむつかしき物なるを、如此転義をすら重隔対に作成して、吾下情を露し出たるは、実に微妙の所為なること、感ずるにも余りあり。古くより人麿赤人を一雙にいひ来つれど、赤人の歌には常対のみ多く、隔対をだに作るは少く、況て転義を用ゐたる歌の見えざるを以ても、その甲乙は論を俟つべきにあらず。

と述べ、その他多くの歌格研究者は、長歌の比較において、赤人の著しく劣つてゐることを証

論してゐる。さて憶良の長歌が、赤人より遙かに優れてゐることは、何人にも明瞭である。例へば、長歌の形体にしても、憶良は、貧窮問答（八九二）に見る如く、二長歌を連接したもので、令^レ反^ニ感情^一歌（八〇〇）に見る如く、三長歌を接続したものまで詠んでゐる。今長歌の平均句数を調査するに、長歌を唯一首のみ残してゐる歌人の中にも、五十五句、四十五句の如く長いものもあるが、三首以上の歌人について見ると次の如くである。

8	7	6	5	4	3	2	1	
笠	大	田	高	山	人	大	大	柿
	伴	辺	橋	上	磨	伴	伴	本
金	坂	福	虫	憶	(人磨集加算)	家	池	人
村	女	磨	磨	良	持	主	磨	
一	六	二〇	一四	一一	二一	四五	四	一九
二五〇	一六四	三二四	四五七	四六九	八九七	一九六一	一八〇	八五九
二二・七二	二七・三三	三二・四〇	三二・六四	四二・六三	四二・七一	四三・五八	四五・〇〇	四五・二一

歌 数 句 数 平均句数